

## 教育的人間関係の本質構造の解明

—西田幾多郎の「行為的直観」と「私と汝」の概念をたよりに—

高 橋 浩



## 教育的人間関係の本質構造の解明

—西田幾多郎の「行為的直観」と「私と汝」の概念をたよりに—

高 橋 浩

### 目 次

はじめに

1. 西田哲学における人間関係の論理的構造
2. 西田哲学における人間関係の構造論と看護・医療実践
3. 西田哲学をふまえた教育的人間関係の解明

おわりに

## はじめに

本論の課題は、西田哲学を手がかりに教育的人間関係の本質構造を解明することである。今日の日本の哲学界において、わが国独自の哲学的な営為を成し遂げた哲学者として西田幾多郎の哲学を再評価する研究が多く公表されている。その代表的な論者は、西田哲学の現代的意義を指摘した中村雄二郎である<sup>1)</sup>。

中村はフランスで展開されたいわゆるポストモダンの潮流が、伝統的な「哲学」の知を根本的に自己批判して新しい知の地平を切り拓こうとするものであること、またメタ構造主義・ポスト構造主義に位置づけられるフーコー、ドゥルーズ、デリダなどの主張の共通点は「言語」を重視していることであると指摘している<sup>2)</sup>。これによって、概念的真理に代わって差異性にもとづく自由な言語表現が重視されることとなり、また「イメージ」や「身体」に対する見直しが問題となった。そしてイメージを含む感性的なものの権利が復権され、霊と肉、精神と身体という二元論によって人間を捉える考え方が退けられて、心身一体的に「身体」を捉える考え方が強まっていった。こうして主体と客体、主観と客観という近代的な二項対立の意味が失われ、また主体＝主観本位の考え方が再検討されて、主体の対立的な相関者としての「場所」（トポス）が重要な意味をもつにいった。

このようにポストモダンの思想状況とりわけ現代哲学・現代思想の特徴を整理したうえで中村は、これらの問題系はいずれもわが国で唯一独自の哲学的営為を展開していった西田哲学の取り組んだ問題系であることを指摘する<sup>3)</sup>。すなわち西田は、『善の研究』において「純粹経験」の概念を提起することにより、主客合一の意識現象こそ唯一の実在であることを明らかにし、「真理は個人の意識内容を超えた一般性をもつものである」という心理主義への批判を考慮するなかから「場所」の立場に移行していった。すなわち「純粹経験」という直接的な経験と、知を成立させるものとしての概念的知識とがいかに関連するかという課題を問うていくなかで、対象化することができない自己が自己の中に自己を映す「場所」という概念を提出していったのである。

このような現代的な意義をもった西田哲学をふまえて、教育関係を根源的に解明していくことは、教育学とりわけ教育哲学分野における重要な課題であるが、これまでこの課題に取り組んだ論文としては、管見な

がら、増渕幸男著『西田哲学の教育学的解釈の試み－教育関係成立の根拠－』<sup>4)</sup>があるのみである。本論では、この増渕の論考では射程に入っていない西田の「行為的直観」と「私と汝」との概念にまず着目しその内容を明らかにしていく。そして、中村雄二郎が西田の「行為的直観」の概念との類似性を認識した彼の「臨床の知」の議論や、看護実践における看護師と患者との人間関係の考察の成果を検討し、またこの研究成果と西田哲学との関連を考察した論考などを参考にしつつ、教育的人間関係の本質構造を解明し、その成果をふまえて教師と生徒との教育的関係における教師の役割や教師に求められる態度について考察を深めていくことにする。

## 1. 西田哲学における人間関係の論理的構造

### (1) 「行為的直観」

まず西田の「行為的直観」の概念に着目して、この概念の成立のプロセスを辿っていくことにする。

西田は『自覚における直観と反省』（1917年）において、「私が私を知る」ということの本質的意味を次のように説明している<sup>5)</sup>。すなわちアメリカの哲学者J・ロイスの「英国に居て完全なる英国の地図を描く」という比喩を援用しているのだが、英国にあって完全な地図を描くには描いている自分自身を地図の中に描かねばならないが、それは不可能である。完全な像とは、描いている自分自身の像を描き込まねばならないにもかかわらず、描き込まれた像の中にも像を描くという作業は無限に続いてしまう。また時間的な観点から捉えてみると、ある時点で作成された像はその時には一つの像で、その時点で英国の完全な像を作るためには作られたその像を含めた像をさらに作成せねばならないのである。

こうして西田は、「私が私を知る」ということの実相が、「私が私に於いて私を知る」自覚によるのであり、それは「自己が自己の中に自己を写す」ことを可能にする「場所」に於いて知るのであり、私を超越するとともに私を含むものとしての「場所」に於いてはじめて可能になることを指摘している。

この西田の「場所」という概念には、デカルト以来の近代西洋の思考様式に対する批判的な認識が込められている。すなわちデカルトの「我思う、ゆえに、我あり」という認識においては、認識する我は世界の外にあって世界を客観的に捉えるという、主観としての「我」と客観としての「世界」とを峻別する二元論的

世界観が前提とされており、このような思考様式の限界を西田は指摘しようとしたのである。

このような思索の深まりのなかで、西田はさらに現実の世界における人間の在り方に注目し、人間の「行為」と「直観」の関連について検討することによって「行為的直観」の概念を提出していった。

『哲学の根本問題 続編』（1934年）の「現実の世界の論理的構造」と題する論文において、西田は「我々が之に於て生れ之に於て死にゆく世界」について次のように述べている。

「従来、主知主義の立場を脱することのできなかった哲学は所謂対象界という如きものを実在界と考えた。それは我々の外に見る世界に過ぎなかった。之に対しては我々は単に見るものに過ぎなかった。併し眞の現実の世界は我々を包む世界でなければならない。我々が之に於て働く世界でなければならない。行動の世界でなければならない。」<sup>6)</sup>

すなわち西田は、我々が認識の主体として世界の外に立って世界を眺める存在ではなく、身体をもち物と必然的で直接的な関わりの中で行為する存在であり、見ること（＝直観すること）と働くこと（＝行為すること）とが切り離しえないものであることを指摘しているのである。そしてこのような基本認識から「行為的直観」の概念の考察へと進んでいく。

一般に「直観」とは、対象からの働きかけを主体が受け取るかたちで生ずるものと考えられている。したがってこのような「行為的直観」というような概念は、空虚で神秘的なもののように捉えられるであろうことを西田も認めている<sup>7)</sup>。

しかしながら西田は、「行為」と「直観」との両者はたしかに対立する側面をもっているが、同時に現実の世界においては自己同一的に結びついているものとして捉えており、この両者の関係が「絶対矛盾的自己同一」という関係にあることを指摘している。この「絶対矛盾的自己同一」は、西田哲学の核心的な術語として用いられる概念であるが、主観と客観、私と汝、一と多など相対立し自己矛盾的存在である両者を、同時に自己同一を保持しているものとして認識する。「行為」と「直観」の両者の関係もこの概念によって把握しているのである。

まず西田は、行為の意味について次のように述べている。我々は経験をとおして知識を獲得するが、この経験は言うまでもなく我々の具体的な行為によってもたらされる。行為には物が必要となり、我々是对立する物に働きかけて物を変化させようとする。これに対

して物は我々の行為を限定する。すなわち「行為ということ、我が物を動かし物が我を動かすことである、主観が客観を限定し客観が主観を限定することである。」<sup>8)</sup>すなわち我々は物との相互限定をもたらす行為によって物を見ている（直観する）のであり、知識の基本としての経験をj得ているのである。

このように西田は、我々が世界の外に立って世界を見ているのではなく、我々は本質的に物との直接的な関わりの中に立つ行為的存在であることを指摘しているのである。彼は次のように述べている。

「…我々は行為によって物を見、物が我を限定すると共に我が物を限定する。それが行為的直観である。我々が経験を知識の基本と考へなければならぬといふのも、経験というのjがかゝる意味に於ての行為的直観なるが故である。」<sup>9)</sup>

さらに西田は「行為的直観」の考察の中で、我々の行為は身体が道具を用いて物を制作（ポイエシス）する創造的行為であることを述べているとともに、我々は歴史的生命として存在し、歴史的世界における創造的要素として世界を形成する存在であることも指摘している。

我々の行為は物を外に形成する制作としての意味をもっているが、我々はどこまでも身体的であるとともに、我々はすべての物を道具としてもつ可能性をもつ。そしてそれは逆に物が我々の身体となるということである。それは我々の自己が道具的世界に入るということもできる。これは一面において自己が消え去ることである。そしてそれは物から我を見ることであり、自己の身体を物として見ることである。道具としてもつということである。そして西田はこの点を次のように表現している。

「我々の行動はいつも主観的・客観的である。その主観的方向に、時間的方向に、身体というものが見られ、その客観的方向に、空間的方向に、物というものが見られる。しかし我々は主観的・客観的に世界を形成し行くのである。」<sup>10)</sup>

西田はこのように、人間の現実の世界あるいは歴史的世界におけるあり方や行為および認識の意味を「行為的直観」という概念によって捉えていったが、現実の社会における人と人との関係をどのように把握していたのであろうか。

## (2) 「私と汝」

西田は、後期哲学の端緒を拓くにあたって、著書『無

の自覚的限定』(1932年)における論文「私と汝」で、人格的自己と人格的自己との関係についての考察を深めていった。この議論は、教育的人間関係の本質構造を解明しようとする我々にとってきわめて重要な課題である。

まず西田は「私と汝」の冒頭で、私と汝とがいかに互いに意思を通じ合えるのかという問題について次のように述べている。すなわち私は現在何を考え何を思っているかということのみならず、昨日何を考え何を思ったかということ想起できる。昨日の私と今日の私とは直接結合すると考えられる。

「之に反し、私は他人が何を考え、何を思うかを知ることではできない。他人と私とは言語とか文字とかいう如き所謂表現を通じて相理解するのである。私と汝とは直に結合することはできない、唯外界を通じて相結合すると考えられるのである。我々は身体によって物の世界に属し、音とか形とかいう物体現象を手段として相理解すると考えられる。」<sup>(11)</sup>

すなわち我々は、「音とか形とかいう物体現象」を手段として、すなわち言語・文字を媒介として相互の理解を深めているのであるが、この私と汝の相互関係の前提として、すでに「行為的直観」の考察の部分で確認した二元論的な認識の構造をここでも退けている。私と汝との関係についての難問は、各自が絶対的に自己自身に固有なる内界を有つと考えるから起るのであり、「我々が厳密なる意味に於て個人的自己の意識というものから出立するならば、遂に独我論に陥るの他ない。」<sup>(12)</sup>

西田はこの問題を同箇所で「内界と外界との対立」と表現しているが、このような前提では両者の相互理解は図れないことを指摘している。そしてこのような理解の延長上にある認識として、自分が行う表現内容の根底にある感情から類推して相手の感情を理解しようとする類推論や、相手の表現に没入することによって相手を理解しようとする感情移入論を例に挙げ、これらによっても私と汝の真の相互理解は不可能であることも提起しているのである<sup>(13)</sup>。

それでは私と汝とが相互に理解していく人間関係を、どのような構造として西田は理解しているのだろうか。

まず彼は両者の基盤としての環境の存在について次のように述べている。「私を私として限定するものは、汝を汝をとして限定するものであり、私と汝とは同じ環境から生れ、同じ一般者の外延として之に於てあるという意味を有つとすることができる。」<sup>(14)</sup>すなわち環

境は個人が生まれるために必要なものであり、個物(=個人)は環境から限定されてはじめて存在することができる。一方環境も個物によって限定されることとなる。私と汝とは、同一の環境=一般者によって限定されることにより、同一の環境=一般者において在るものとして関係し合いつつ、環境すなわち社会を歴史的に動かし、これを変えていくのである。

そして西田は彼の弁証法によって社会的・歴史的世界をめぐる考察を展開していくのであるが、ここで特に注目すべきは「物質」についての叙述である。この物質は、個物や「私」を限定する環境を指すものと理解しうるのであろうが、西田は真の物質と考えられるのは歴史的物質でなければならないと指摘する。

具体的に存在するものは、はじめから無の限定として、環境が個物を限定し個物を環境が限定するという弁証法的運動としてある。このような弁証法的運動と考えられるものが、絶対否定によって非連続の連続として考えられねばならないから、このような過程の一面として意識というものが考えられる。個人的意識を生むと考えられる歴史的物質は、もとより弁証法的として意識面をもったものでなければならない。意識面と考えられるものが一面において物質界であり、物質界と考えられるものが一面において意識界であるとも言いうるのである。そして物質が非合理的と言われるのは、もとより物質が個人的自己に対して絶対否定性をもつ弁証法的物質だからであり、したがって物質は絶対の無と考えられる。西田はこの点を次のように指摘している。

「かかる個物的限定の底に、之を基礎付けるものとして非合理的なるものが考えられるならば、それは所謂物質という如きものではなくして弁証法的物質というべきものであろう。而してかかる物質は絶対の無と考えられるものでなければならぬ。」<sup>(15)</sup>

そして、この「絶対の無」としての物質すなわち環境は死即生の絶対面を有するものとして私と汝をともに限定する一般者であり、この一般者の媒介によって我々は互いに人格として相働くことができる。我々は共に身体をもつ存在であるが、この身体は単なる物質ではなく社会的・歴史的事物と言えらる。また我々を限定する環境としての物質も単なる物質ではなく、社会的・歴史的物質である。こうして我々を共に限定し媒介する環境としての物質が同一の原理として働くことにより、我々の発する「音とか形」としての言語によって意思の疎通を図っているのである。この点に関連して西田は、次のように指摘している。

「私と汝との間には、同一の一般者に於てあるものとして、色が色に干渉し、音が音に干渉する意味がなければならない。私と汝とは共に弁証法的限定によって限定せられたものとして、私と汝とは絶対の否定によって媒介せられてあると考えられねばならぬ。」<sup>(16)</sup>

さらに西田は、彼の絶対否定の弁証法の論理によって私と汝の人格的關係の論理をめぐる考察を深めていく。まず私と汝との間に何らかの他に媒介するものがある、自己が他になり他が自己になるのではない。絶対否定の弁証法においては、自己が自己の中に絶対の他を含んでいなければならない。自己が自己の中に絶対の否定を含んでいなければならない。自己自身の存在の底に他があるのであり、他の存在の底に自己があるのである。自己は自己自身の底を通して他となるのである。西田は私と汝の内的結びつき、内的交流について次のように述べている。

「私は汝を認めることによって私であり、汝は私を認めることによって汝である。私の底に汝があり、汝の底に私がある。私は私の底を通じて汝へ、汝は汝の底を通じて私へ結合するのである。絶対に他なるが故に内的に結合するのである。」<sup>(17)</sup>

ところで西田は、私が汝を知り汝が私を知るには「直観」と考えられるものがなければならないことを指摘している。しかしこの場合の直観は、芸術的直観を典型として考えられるように我々が直に物と合一することではなく、すでに上述したように、自己自身の底に絶対の他を蔵し、自己が自己の底から他に転じていくということではなければならない。自己と他とが一となるとことではなく、自己の中に絶対の他を見るということではなければならないのである<sup>(18)</sup>。

また私と汝とは弁証法的關係に立っているがゆえに、私は私の人格的行為の反響によって汝を、汝は汝の人格的行為の反響によって私を知るのである。我々が各自の底に絶対の他を認め互いに各自の内から他に移行していくということが、真に自覚的な人格的行為と考えられるものであり、このような行為において私と汝とが相触れるのである。すなわち行為と行為との応答によって私と汝とが相知るのである<sup>(19)</sup>。

ここで注目すべきは、「私と汝とが、人格的行為の反響により直観を通して互いに触れ合い互いに知る」という認識は、前項で確認した「行為的直観」の概念に通ずることである。

ただし、人格的な私と人格的な他者との關係における行為的直観は、芸術的直観を典型とするような我々が直に物と合一すること、すなわち自己と他とが一に

なることではなく、自己自身の底に絶対の他を蔵し自己の中に絶対の他を見ることであり、自己が自己の底から他に転じていくことである。我と汝とはあくまでもそれぞれ独立した存在であり非連続の連続という關係にあるが、両者の根底にある絶対無に否定されることによって肯定されるという仕方でも媒介され、互いの行為の相互作用を通して互いを知るのである。

このように西田は、人格的自己と人格的自己との關係を絶対矛盾的自己同一として弁証法的に把握しているのである。

## 2. 西田哲学における人間關係の構造論と看護・医療実践

これまで検討してきた「行為的直観」および「私と汝」の概念を中心とした西田の人間關係をめぐる議論については、これまで特に医療や看護の分野で注目されてきた。本章においてはこれらの先行研究を概観しつつ、西田の議論がいかに受け止められ、医療・看護分野の実践にどのような示唆を与えているのかを検討したい。

### (1) 中村雄二郎の「臨床の知」と西田の「行為的直観」

すでに冒頭の問題提起の箇所であれわれは、中村雄二郎が西田哲学の現代的意義を指摘したことを見たが、本項では中村の「臨床の知」の概念を詳細に検討し、中村が注目した西田の「行為的直観」の概念が今日の医療や看護の実践にどのような示唆を与えうるかを考察したい。

中村はまず近代的な「科学の知」の構成原理を①普遍性、②論理性、③客観性の三つであることを述べたうえで、彼の「臨床の知」の構成原理が①コスモロジー、②シンボリズム、③パフォーマンスの三つであることを指摘する<sup>(20)</sup>。

まず「コスモロジー」であるが、これは場所や空間を、普遍主義の場合のように無性格で均質な拡がりとしてではなく、一つ一つが有機的な秩序をもち意味をもった領界と見なす立場であるという。したがって個々の場合や場所（トポス）が重要となる。

次に「シンボリズム」は、抽象記号ではなくことばによるように、物事をそのもつさまざまな側面から一義的ではなく多義的・多面的に捉え表す立場である。

そして「パフォーマンス」とは、人間が行為する際にその行為が身体性を帯びたものであり、その時わが

身に相手や自己を取り巻く環境からのパトス的（受動的・受苦的）な働きかけを受けつつ行為すると捉え、そこに相互作用が成立すると捉える立場である。

このような叙述の後に中村は、抽象的な普遍性によって分析的に因果律に従う現実に関わり、それを操作的に対象化する近代的な「科学の知」に対して、彼の「臨床の知」を次のように定義している。すなわち「『臨床の知』は、個々の場合や場所を重視して深層の現実にかかわり、世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに読み取り、捉える働きをする」<sup>(21)</sup>ものであるという。また「科学の知」が主として仮説と演繹的推理と実験の反復から成立しているのに対して、「臨床の知」は「直感と経験と類推の積み重ねから成り立っているのだから、そこにおいては『経験』が大きな働きをし、また大きな意味をもっている」ことも述べているのである<sup>(22)</sup>。

このような「臨床の知」の概念の内容は中村本人も認めているように<sup>(23)</sup>、すでに我々が前章で検討した西田の「行為的直観」の概念と極めて近いものであることを理解することができる。西田の「行為的直観」においても、我々は認識の主体として世界の外に立って世界を眺める存在なのではなく、「場所」ないし「無の場所」において身体をもち他者や事物と直接的な関わりの中で互いに限定し合う行為的存在として捉えられていたのである。また「行為的直観」から生起する具体的な状況における「経験」の意義を西田は指摘しているのである。

さらに中村はこの「臨床の知」という知の在り方や学問の方法が、今日の医療や医学に対してどのような意味をもっているのかという観点から考察を深めている<sup>(24)</sup>。

まず中村は、現代西洋医学の源流であるヒポクラテスに代表される古代ギリシャの医学を概観しつつ、臨床的な医療と医学の原型を捉えなおしている。ヒポクラテスは、当時の哲学者が病氣や死を<寒と熱><乾と湿>などといった恣意的な二元論から演繹的に説明し処理したことに対して次のように反論した。すなわちヒポクラテスが重視したのは季節・天候不順・食事などの不摂生・不健康な職業などの病氣の自然的原因であり、病氣を独立した実体としてではなく<病める人>の状態として捉えた。病氣とは局所的な出来事である以前に全身的な異変であり体液の乱れである。したがって治療にあたってはその原因を取り除くことであり、医師の務めは人体に備わった自然治癒力を助けて増大させることであるとする。

その際に医療に於いて不可欠なことは、臨床場面での観察と経験であり、なまの臨床的な観察とその上に立った直接的な推理である。そして医療は人の病氣という極めて重要な実地の機会に出番をもつテクネー（技術＝アート）であるとヒポクラテスは捉えていた。

そして18世紀から始まる臨床医学の近代の医学教育制度への導入や医学的臨床の不用意な組織化・制度化によって、中村は彼が「臨床の知」と特徴づける臨床的な医療、すなわち具体的・個別的な患者との相互関係のなかで観察と経験をとおして行っていくような医療が変質していった事実を指摘している。

このような臨床的な医療の変質の延長上にある現在の医療の問題点を指摘している箇所では中村は、「科学的医療への妄信」とりわけ「特定病因説」を取り上げて検討している。これは「病氣には特定の原因があり、それを絶滅すれば、あるいは取り除けば、病氣は治癒する、との考え方」<sup>(25)</sup>であり、現代の医学・医療の中核を占めている立場であって、19世紀の病原細菌の発見によってクローズアップされるようになった学説である。中村によれば、この説が医学の悪しき専門化、不必要な処方などをもたらし総合的な見地を欠いた単なる専門化を推進してきたという。

この中村の主張の背景にあるのは、我々人間は身体性をそなえた存在である以上、医師・患者関係も人間同士の関係であり、パトス（受苦・痛み）を帯びた者同士の個別的・独自の関係のなかで医療が展開されるべきとする「臨床の知」の立場である。

## (2) 中村雄二郎の「臨床の知」と西田哲学が看護実践に示唆するもの

さらに中村の「臨床の知」及び西田哲学とりわけ「行為的直観」の概念の意義を裏付ける実践的な医療の現場での事例を紹介したい。

近年、看護の専門家である看護師の実地の経験に即して「看護」という営みを記述し、そのあり方を理論的・哲学的に解明しようとする研究が増えているという<sup>(26)</sup>。そのような研究の一つに西村ユミの『語りかける身体 看護ケアの現象学』がある<sup>(27)</sup>。この研究は、何のふるまいも声も発することができず他者との交流が不可能な存在であるとされていた「植物状態」と呼ばれる患者に対して、実際にケアを行った看護師が、彼らとの間に確かな交流を感じ取り豊かな経験として受け止めていることを看護学研究者の西村が認識し、看護師が患者と「通じ合っている」という感覚を得て



いるという経験の意味を分析していったものである。

西村は、彼女自身の看護師としての実践と他の看護師の体験から、「植物状態」である患者との間には「言葉がなくとも伝わってくる、あるいは一緒にいるだけで強烈に響いてくること」<sup>28)</sup>があり、見てとることや聞くことはできないが確かに感じとれるような患者との交流・触れ合いが存在していることを確信した。しかしながら看護師自身はこの事実を困惑と葛藤の感情のなかで受け止めていたという。すなわち実証性・検証性を重視する看護現場を支配する自然科学的な発想の中で、「植物状態」にある患者との間の交流・触れ合いを彼女たち自身は違和感を内面に抱えながら看護にあたっていたのである。

西村は看護師が体験するこのような事実は、看護実践にとって本質的な意義をもち看護の原点に関わる問題であることを認識し、看護師と「植物状態」にある患者との間に生起する関わりを、メルロポンティの現象学的方法論を手掛かりに行ったものである。研究の中心部分は、「植物状態」にある住田さんを看護したAさんに対する聞き取り調査であり、その内容を丹念に分析していった。そしてこの研究の前提は、看護師と患者との関係を主客分離の二元論的な枠組みで捉えるのではなく、自己と他者の区別が未分化な次元に遡及していくというものであるという。

まず西村は、Aさんが住田さんと交わした交流を視線が「合う」とは言わず「視線が『絡む』」と表現したことに注目する。これはいかにも身体接触を思わせる触覚的な言葉であり、「まさしくここには、認識および聴覚、視覚という知覚経験が混然一体となって表現されており、」<sup>29)</sup>原初的地層における具体的経験である。そしてこの経験は看護のいとなみが動的に生成されるその根源にあるものとして働いていると西村は指摘する。

またAさんは「視線が絡む」では「ピッと」というように瞬時に起こっていることとして表現し、そしてAさんの声かけに「キュー」と手に力が込められるという一連の時間の流れが何らかの意味をまとうための手がかりとなっていたことを西村は指摘した上で、次のように分析する。すなわちAさんはこうした時間性を、住田さんとのコミュニケーションの可能性に触れるなかで「タイミングが合う」と語ったが、「Aさんの行為と住田さんの行為とが明確に区別できず両者が融合しているような、そんな感覚として受け止められていた」<sup>30)</sup>であり、「タイミングが合う」とは、二人で一つの行為をなし遂げるその刹那に感じとられこと

であるという。

さらに西村は、Aさんが受け持ち患者との間に醸成される「雰囲気」の意味について述べたことに注目している。すなわちAさんは患者との関係から紡ぎ出される「雰囲気」によって患者との相互の「交流の手応え」を強く感じとっていたのである。患者の動きや表情から「楽しい雰囲気を感じられる」ということは、患者の動きや表情のみを注視しているのではなく、ある意味を帯びたものとして、あるいは「一つの事実」として看護師に見えている。この一つの事実が「雰囲気」という意味をまとっているのであるが、この背後に潜むものが「運動の地」であり、「この『地』とは、この次元における関係の濃密さや馴染みによってその都度、流動的に決められているもの」であると西村は指摘している。

以上のような西村の研究成果は、既に我々が確認した中村雄二郎の「臨床の知」の概念に通ずるものであるといえよう。すなわち中村は近代科学の限界を克服する「臨床の知」の構成原理として、一つ一つの場所（トポス）や空間を有機的な秩序と意味をもった重要な領界とみなす〈コスモロジー〉、物事をそのもつさまざまな側面から多義的・多面的に捉え表そうとする〈シンボリズム〉、人間の行為が身体性を帯びたものとして捉え、自己が相手に働きかけると同時に相手や自己の環境からパトス的（受動的・受苦的）な働きかけを受けるとする〈パフォーマンス〉の三つを挙げたが、上述した西村の論点のなかにこの三つの原理を確認することができる。

西村はAさんと住田さんとの「通じ合っている」雰囲気の背後に「運動の地」があることを指摘していたが、これは看護師と患者との間に醸成された固有の「場所」の問題であった。またAさんが「視線が絡む」と表現した問題は、認識そして聴覚・視覚などの知覚経験が混然一体となって表現されたものであり、この表現に込められた多様で多義的な感情を西村が読みとっていったものである。さらに「視線が絡む」という感じとられた点については、患者との関わりのなかで接触としてAさんの「身体」に痕跡を残したものであった。

西村の研究は現象学的方法論によって遂行されたものであるが、看護に関わる人間関係の根底をめぐる研究成果の内容を見る限り、中村の「臨床の知」の原理が示す論点と軌を一にしているといえるのである。中村の「臨床の知」の概念が西田哲学の概念とりわけ「行為的直観」の概念ときわめて近接していることを

考慮するとき、西村が明らかにした看護を支える人間関係の考察を西田哲学の視点から捉えかえす可能性が浮かびあがってくる。

西村の研究成果を、西田幾多郎の『善の研究』における思想的枠組みを頼りに分析した論文がある。それは、松本直樹著「看護行為と他者認識—西村ユミの研究と西田幾多郎の思索から—」であるが、松本は上述したAさんと住田さんとの関係における「タイミングが合う」という事象が成立する条件が、当事者たちの行為が「二人で一つの行為をなし遂げる」ように経験され、その行為が「コマ送りの画像のように」ではなく、あるまとまった「一つの事実」としてみてとられることを述べたうえで、西田の議論をふまえて次のように考察している。

西田の「個人あって経験あるにあらず、経験あって個人あるのである。」<sup>(31)</sup>という純粹経験の規定において、「一の体系」をなす個人的経験の統一が個々人の経験を越えて複数の人格にまたがること（人々が「同一の時間に住まう」こと）、またこの経験の統一作用が個々人の意識に無意識な「傾向の感情」<sup>(32)</sup>と西田が呼ぶある種の気分として感受され、この感情が「…せずにはいられない」と主体を背後から突き動かすことになる<sup>(33)</sup>と松本は指摘している。

さらに松本は、Aさんの行為と住田さんの行為とが明確に区別できず両者が融合しているような感覚を成立させているにもかかわらず、両者の間に自他の区別は厳然としていることも西田の議論を射程に入れながら考察している。西田は、あるものに精神を認めるときに他者として理解するが、それを「独立自全の實在」として「動かすべからざる一の統一を現わして居る」ものとして感受することを指摘する<sup>(34)</sup>。これは主客分離の二元的な枠組みにおいてではなく、主客合一的な情意を交えた「直覚」としての経験として成立しているのである。この西田の議論から松本は、自他の区別と融合が一見矛盾するような事態について次のように指摘する。「自他が奪いがたい統一を示すこと、その意味で互いに他として対峙すること自体が情意的な主客合一・自他融合の直覚において経験される、というのが西田の考えなのである。」<sup>(35)</sup>このような事態がAさんと住田さんとの間に生じたことを指摘しているのである。

以上の松本の考察は、西村による看護実践における人間関係に対する現象学的な分析を西田哲学の視点から捉えなおしたものであり、近代の二元論的な思维では把握しきれない主客未分の層におけるいわば「目に

見えない関係」の意味を解明したものとして重要な意義をもっている。しかしながら、彼の考察は西田の『善の研究』との関連に絞ったものであり、すでに我々が検討した「行為的直観」論および「我と汝」論との関連から見えてくる問題についての考察が課題として残っていると思われる。

すなわち一つは、看護者と患者とによって生起する雰囲気背後に潜むものとして指摘された「運動の地」は、西田の「場所」ないし「無の場所」と密接に関連しており、この点から考察を深める必要があろう。また看護師と患者との間の自他の区別と融合との矛盾的な関係についての問題も、絶対矛盾的自己同一の関係としての「我と汝」の関係という観点から考察していく必要がある。

すでに指摘したように後期の西田哲学にあつては、私は私の人格的行為の反響によって汝を、汝は汝の人格的行為の反響によって私を知るのである。人格的な私と人格的な汝との関係における「行為的直観」は、自己自身の底に絶対の他を蔵し自己の中に絶対の他を見ることによって自己が自己の底から他に転じていくのである。私と汝とは、両者の対立を超越してこれを内に成立せしめる「無の場所」に於いて在る。そして私と汝は弁証法的な関係にあり、それぞれ独立した存在として非連続の連続という関係にある。すなわち両者は絶対矛盾的自己同一の関係にあるのである。

### 3. 西田哲学をふまえた教育的人間関係の解明

それでは、本論における最終的な検討課題である教育的人間関係の本質とは何かという問題を、これまでの検討結果をふまえて明らかにしていきたい。

#### (1) 教育的人間関係の特質と西田哲学

この問題についての先行研究として注目すべきは、冒頭にも紹介した増淵幸男著「西田哲学の教育学的解釈の試み—教育関係成立の根拠—」である。本論において増淵は、教師と生徒の教育関係を成立させる人間理解の根拠、そしてこの関係を包み込んでいる普遍的構造（増淵はこれを「原構造」[Ur-struktur]と呼ぶ。）を西田哲学の「場の論理」に依拠しつつ教育哲学的考察を試みている<sup>(36)</sup>。

まず増淵は、教育の場にあつて教師と生徒との関係がお互いに自由な人間同士の関係にあることを前提に

成立していることを指摘している。したがって両者は「個と個」「主体と主体」の関係にあるのであり、相対立し矛盾する関係にあるといえる。他方教師と生徒との関係は一般的に、教師の立場を熟知した意識、生徒の立場を未熟な意識、とみなすことにおいて成立している。教師は熟知していればいるほど未熟な生徒の意識に入り込み、生徒は未熟であれば熟知した意識に一致・統合化するように駆り立てられる。すなわち教育関係においては、「教師と生徒の意識は決定的に隔たりがあるにもかかわらず、主客合一の意識領野に取り込まれていく必要がある。根本的に区別された意識が同一性にまで高まるということである。」<sup>37)</sup>

そして増測は、このような絶対的に相対立し矛盾する諸契機が対立しながらも同一化へと進展していくような教育的な人間関係の「原構造」を、西田の「場の論理」に見出したのである。すなわち教師と生徒とは絶対的にそれぞれが他者であるとともに、他者を認めた自己の内部で他者へと移り行くのであり、そうした矛盾の自己同一的な弁証法的関係にあってはじめて、「各自の底に絶対の他を認め互に各自の内から他に移り行くといふことが、真に自覚的なる人格的行為と考へられる」<sup>38)</sup>。

以上の増測の分析は、すでにわれわれが前章で検討した看護師と患者との人間関係についての認識と基本的に同一のものである。看護師と患者との「我と汝」関係にあっては、私は私の人格的行為の反響によって汝を、汝は汝の人格的行為の反響によって私を知るのであり、自己自身の底に絶対の他を蔵し自己の中に絶対の他を見ることによって自己が自己の底から他に転じていくとされたが、このような関係は西田の「行為的直観」によって成立するのであった。

増測も、教師と生徒との教育関係を成立せしめる契機として、「真の直観」ないし「飛躍を含む直観」<sup>39)</sup>が必要であることを指摘しているが、これを「行為的直観」の概念として把握していない。

ここで再度、自己と他者との関係を「行為的直観」という概念で把握しようとする西田の議論を確認することにしたい。西田は「行為的直観」を「私と汝とが、人格的行為の反響により直観を通して互いに触れ合い互いに知る」とことと指摘していたが、それぞれ独立した存在である私と汝とは両者の根底にある絶対他者としての「絶対無」に否定されることによって肯定されるという仕方で媒介され、互いの行為の相互作用を通して互いを知る所以であった。私は私自身の根底をどこまでも掘り下げていったとき、私自身の根底に私自身

を否定する「絶対無」を見出す。また「絶対無」は汝の底にもあり、その「絶対無」に否定的に媒介されることによって私と汝とは互いに知り合うのである。

このような「絶対無」に媒介された教師と生徒との関係の成立という問題をより詳細に検討して行くことにする。先ほど指摘したように、教育的関係成立の過程において知的小および人間的に成熟した教師は未熟である生徒の意識に入り込もうとし、一方生徒は熟知した教師の意識に一致・統合化するように駆り立てられるのである。

増測はこのプロセスにおける教師自身の自己否定の重要性について次のように述べている。まず教師が自己自身の「個」に固執しては生徒の「個」は消失するから、自らの「個」が生徒の「個」のなかに委譲し包容されるように教師自らの「個」を否定することが真の自己否定である。すなわち「教師が自らの『個』を自己否定することによって、彼の『個』は生徒の『個』のなかに生かされることでなければならない。」<sup>40)</sup>

この増測の指摘は、教師と生徒との根底にある「絶対無」に教師の自己意識が否定されることによって両者の教育関係が成立し、その発端は教師の自己否定にあることを示唆している。この教師の働きかけに促されることによって生徒の意識の変化が生じ、生徒が心を開いて教師の存在を受け入れることになり、「他者において自己を、自己において他者を生かしあう」<sup>41)</sup>関係が成立するのである。この教師と生徒との教育的人間関係は、西田が指摘した「絶対他者としての『絶対無』に否定されることによって私と汝とは互いに触れ合い互いに知り合う」という人間関係一般の相互関係と若干関係性が相違しているものであり、ここに教育的人間関係の特殊性が存在しているのである。この特殊性とは、教師の働きかけを受ける被教育者としての生徒が相対的に未成熟者であり、教師の教育実践に促されて生徒の意識の変化が生じ、これに呼応して自己否定的に教師の存在と意識に心に向け、また心を開いていく点にある。

## (2) 教師の自己超越の必然性

それでは発端としての教師の自己否定的意識に裏付けられた生徒への働きかけが、いかなるプロセスでこれに呼応する生徒からの対応が生じうるのだろうか。

ドイツの教育哲学者ボルノウ (Otto Friedrich Bollnow) は、かつて教育を成功に導くための教師と生徒との人間関係を「教育的雰囲気」(Die

Pädagogische Atmosphäre) という概念で説明した。ボルノウは「教育的雰囲気」を「教師と児童の間に成立し、あらゆる個々の教育的なふるまいの背景をなす情動的な条件と人間的な態度の全体を意味する」<sup>(42)</sup>とし、またこれが「教育がなにほどかの成功をおさめるためには、それらが不可欠の前提として存在していなければならないと考えられる」<sup>(43)</sup>のものであるとしている。

教師の一定の情動的な態度と子どものそれとは、両者を等しくともに包み込むひとつの情動的媒質の違った二つの局面であるが、「教育的雰囲気」は両者の相互作用によって成立するのであるから、一方で子どもの視点に立って考察するとともに、他方で教師の視点からも考察していく必要があるとしている。

まず子どもからの視点に立った考察においては、家や家族の保護の囲いのなかで庇護されているという感情を子どもが持つことが重要であり、特に家庭での特定の個人すなわち一般的には母親に庇護されているという感情を抱くことが重要であり、こうしてはじめて教育的雰囲気の基本的な形が成立する。そして母親に対する愛、信頼、感謝、従順などの態度の延長線上に芽生えるものが、特定の個人への信頼を超えた世界に対する信頼観であり、このような感情に子どもが満たされることによって、子どもは健全な成長を遂げることができるとボルノウは指摘しているのである<sup>(44)</sup>。

この子どもが抱く母親ないし親そして他の大人に対する信頼の感情は、子どもの成長過程において崩壊する危険性をはらんでいる。したがって子どもは他者に対する信頼の感情を絶えず新たに形成していく必要がある。ここに人間形成の重要な課題がある。それでは子どもの人間形成に関わる存在である教師は、この課題にどのように応えていく必要があるのだろうか。

ボルノウは教師の視点からの考察のなかで、子どもへの愛と信頼の感情が子どもとの間に教育的雰囲気を醸成させるうえで不可欠なものであることを述べている。特にボルノウは倫理学者のハルトマン (Nicolai Hartmann) の「信頼 (信念) は人間を改造することができる」という言葉を引用しつつ、子どもに対する教師の信頼の重要性を強調している。すなわち信頼には強い形成力・創造力があることを指摘しているのである<sup>(45)</sup>。

しかしながらこの信頼は自由で予測できない態度を取る子どもに向けられたものであり、この信頼は失望させられることを認識していなければならない。教師の信頼は絶えず裏切られ挫折させられる危険を伴って

おり、一つの冒険でもある。教師はこのような失望の後に新たな信頼の力を奮い起こさなければならないのであるが、その際に教師に求められることとしてボルノウは次のように述べている。

「信頼は、単なる意図によって作り上げられるものではなく、個々のあらゆる信頼にさいして、自分自身が、あらゆる失望をこえてなおゆるがぬ一般的かつ包括的な、存在と生に対する信頼—キリスト教的にいうならば神への信頼—によって支えられていると感じている人にも、訪れるものだからである。この存在と生に対する信頼の中にこそ、教育者たることの究極的な不可欠の前提がひそんでいる。」<sup>(46)</sup>

以上のボルノウの指摘から、先ほどの検討課題についての一つの示唆が得られるのではないだろうか。すなわち「存在と生に対する信頼」ないし「神への信頼」の感情に満たされた教師の自己否定的な意識に裏付けられた生徒への忍耐強い働きかけは、他者としての生徒の存在そのものを包容し生徒の心を動かしていく。自己の「個」に固執することなく心を開いて教師の存在を受け入れた生徒は、教師への信頼と感謝そして尊敬などの感情に満たされることによって、存在と生に対する信頼の感情、すなわち世界への信頼の感情を抱くことになる。

ここでボルノウが指摘する教師に求められる「存在と生に対する信頼」および「神への信頼」という感情は、キリスト教的な前提のもとに教師の自己超越の必要性が述べられているのに対して、われわれがこれまで検討してきた西田の「絶対無」に導かれた教師の自己否定は、東洋的な自己超越を説いているのであり、必ずしも両者の議論の異同を無視して検討を進めることはできないが、教育的な人間関係を成立せしめるうえで教師の自己否定・自己超越が必要であり、またそれに応える生徒の感情の変化の意義を提起しているボルノウの議論は大きな示唆を与えるものである。

特にここで注目しなければならないことは、「存在と生への信頼」および他者への信頼の感情が欠如した被教育者や最も微弱な生命力しかもたない他者との間に成立する教育的な関係についてである。すなわち最も困難な状況にある被教育者との関係において、ボルノウの指摘する「教育的雰囲気」が成立したり、西田が指摘する「各自の底に絶対の他を認め互に各自の内から他に移り行く」ような関係が成立するという事柄は、教育の根源的な問題であり、教育という働きかけの本質的な意味を考察するうえで意義深いことなのである。

教育哲学者・林竹二は須賀川養護学校の安藤先生の以下の実践のなかに教育実践の原点があることを指摘している。すなわち安藤先生は、養護学校に隣接する病院併設の重度心身障害児（者）施設に収容されていた勝弘君に対して忍耐強い働きかけを続けていった。当時勝弘君は9歳3か月で在院8年、両眼球形成不全症（一方の目には瞳孔がない）であるうえ、高度の難聴、それに重い脳性麻痺で言語なく歩行不能という五重の重い障害を背負っていた。病院のスタッフもただ生きているだけというような見方で彼を見ていたらしく、「とても9歳とは思えないやせた身体を海老のように折りまげて、…いつ見てもまったくおなじ格好をして、ひとつの物体がおいてあるように…うすぐらい病室のベッドのうえに横たわっている」<sup>47</sup>状態であったという。

安藤先生は同じ人間なのだから心がいつか通じないはずはないと考え、勝弘君に対する忍耐強い働きかけを続けていった。毎日5分か10分訪ねて、勝弘君の手を握って自分のほほに当て、また自分の手を彼のほほにつけて、耳元で「勝弘君、安藤先生だよ」と声をかけ続けたが、やっと3ヶ月目に勝弘君は「天使のような…笑顔」<sup>48</sup>で答えた。そして関わりを始めてから6年11ヶ月目には、激しく揺れるブランコに乗ってしっかりと綱を握って身体を保持する力を獲得していき、その1ヶ月後に勝弘君は小学部を卒業していったという。

このような奇跡的ともいえる勝弘君の変貌・成長を促した安藤先生の実践のなかに、林竹二は教育の原点をみている。すなわち最も微弱な生命しか保持していない勝弘君の生命の力・成長する力を信頼し忍耐強く働きかけ続けた安藤先生の中に、林は教師の権力性を否定しつつ子どもの生命を畏敬する姿勢をみてとり、ここに教育の原点があると指摘する。教師の自己否定的な感情・態度とそこから生ずる子どもの生命を畏敬する姿勢が、子どもの生命の働きを促し、子どもの成長する力を強めていったのである。

ボルノウの指摘する「存在と生への信頼」の感情に支えられた忍耐強い関わりと、林が提起する自己の権力者性を否定し生命への畏敬に満ちた教師の働きかけとは、私と汝の出会いをもたらず西田の「行為的直観」の働きを示唆するものである。前述したように、ボルノウの提起する教師の自己超越はキリスト教の精神性を基盤としたものであり、また林が指摘する教師の自己否定という概念は必ずしも明確ではないが、両者とも、相互に矛盾し対立した教師と生徒との関係が教師

の自己否定的な忍耐強い働きかけを通して、両者が融合し出会いが実現されていく事実を明示しているのである。西田の「行為的直観」にあっても、自己否定的感情によって自己の根底にある「無」を見つめる教師の働きかけは、自己と被教育者との相互に矛盾した両者の対立を超越し、主客合一の意識領野における両者の同一化をもたらず持続的な働きかけとなり、「自己自身の底に絶対の他を蔵し自己の中に絶対の他を見ることによって自己が自己の底から他に転じていく」出会いが創出されることを指示しているのである。

以上の教育関係の本質構造についての考察から、われわれは次のような帰結にいたったことを確認しよう。すなわち西田の「行為的直観」の概念を頼りに教育的人間関係の在り方を検討することによって、教育意図をもった教師が自己否定的で忍耐強い関わりを被教育者との間で展開することを通して、いわゆる教育的な「出会い」が創出されることが明らかになった。また教師と生徒との関係を二元論的な枠組みのみで捉えることによっては、関係自体がその内におかれている領域の問題は解明されず、この解明には両者の関係が生まれ作用しあう行為的世界を解明する西田の「場の論理」に依拠する必要があるのである。

またこの帰結は、教育的な人間関係のみならず、看護・医療あるいは介護などの分野における人間関係の問題においても示唆を与えるものである。すでに確認したいわゆる植物状態にある患者に対する看護において、主観と客観、看護師（ないし医師）と患者という二元論的な関係を前提に成立している現代の医療・看護の実践にあつては、他者との交流は不可能であるとされていた植物状態の患者との関係を射程に入れることはできなかった。この関係を理解するには、両者を包みこむ主客未分の層における関係を見据え考察する論理としての「行為的直観」の論理と、この関係が成立する場の構造を射程に入れる必要があるのである。

教育や医療また介護などの現場で、ある意図を持った行為者が他者の現状の変化・変容を願って関わるときに、西田哲学をふまえた本論の帰結が何らかの示唆を与えることを願うものである。

## おわりに

以上の研究成果は、冒頭の部分で述べたポストモダンの哲学・思想状況のなかで検討課題として射程に入ってきたものであろう。近代科学における人間関係分

析の基本的枠組みにおいては、関係する自己と他者を客観化した二項対立のもとに検討し、両者をいわば「もの化」した関係のなかで分析することになる。これはユダヤ系の哲学者ブーバーがかつて指摘した「我—それ」(Ich-Es) 関係を前提とした分析ということになる。したがってこれまでわれわれが考察してきた「私と汝」の関係を包摂し基礎づける「場」の構造や、両者の自己否定から開示される領域の構造は近代科学のパラダイムでは解明しえないのである。

しかしここで課題として確認しておかねばならないことは、筆者がとりあげたボルノウの「存在と生に対する信頼」および「神への信頼」という概念や、西田の「絶対無」の概念が指し示す信仰レベルの領域をどのように捉えるかということである。筆者はあえて教育的意図をもった教育者の自己超越の在り方として、信仰の領域に立ち入って考察した。西田の議論とりわけ「行為的直観」の議論を掘り下げていくなかで教育的人間関係の在り方を考察するとき、必然的に「絶対無」を見据えた教師の仏教的な自己超越が課題となったのである。

しかし本論での帰結を哲学ないし哲学的人間学のレベルの問題として捉えることも可能であると思われる。あえて信仰を必然的な前提とせず、とりわけ特定の宗教や教派の信仰を前提とせず、人間の生の普遍的な課題として自己超越の問題を捉える可能性もあるものであり、ここに豊かな実践への示唆が開かれてくるのではないか。すなわち日々の教育実践にあって被教育者との関係に苦悩する教師は、西田やボルノウの指し示す自己超越の在り方を実践のヒントにしていくことが可能であろう。またこのように本論の帰結を捉えるときに、看護や医療また介護などの日常的な実践に対しても大きな示唆を与えうるのではないだろうか。ここに本論での筆者の論究の普遍性もあるのではないだろうか。

なお本研究は、横浜商科大学学術研究会の平成15年度個人研究助成を得て行ったものである。ここに感謝の意を表する次第である。

#### <注>

- 1 中村の西田哲学研究の書としては、『西田幾多郎』（岩波書店、1983年）および『西田哲学の脱構築』（岩波書店、1987年）などがある。
- 2 中村雄二郎著（1987）『西田哲学の脱構築』、PP17-19.
- 3 同上書、P19.

- 4 増渕幸男著（1997）「西田哲学の教育学的解釈の試み—教育関係成立の根拠—」（『東北大学教育学部研究年報』、第45集）.
- 5 『西田幾多郎 第2巻』、P16. なお本論での西田の引用は、1987年11月から1989年6月にかけて編集された旧版『西田幾多郎全集』に拠った.
- 6 『西田幾多郎全集 第7巻』、P217.
- 7 西田は次のように述べている。「直観と云えば、人はすぐに単に受動的と考える、或は恍惚の状態であるかの如くに考える。それは行為と正反対の状態と考えられる。…両者は何処までも結合することができないと考えられる。行為的直観という如きことは、空虚な概念か、然らざれば神秘的と考える外ないであろう。」（『西田幾多郎全集 第8巻』、P541.）
- 8 『西田幾多郎全集 第8巻』、P128.
- 9 同上書、P131.
- 10 同上書、PP304-5.
- 11 『西田幾多郎全集 第6巻』、P341.
- 12 同上書、P347.
- 13 同上書、P392.
- 14 同上書、P348.
- 15 同上書、P380.
- 16 同上書、P372.
- 17 同上書、P381.
- 18 同上書、P392.
- 19 同上書、P392.
- 20 中村雄二郎著（1992）『臨床の知とは何か』、岩波新書、PP133-136.
- 21 同上書、P135.
- 22 同上書、P136.
- 23 中村は同書で、「このように、西田幾多郎の考えを出来るだけ忠実に見てくると、西田のいう<行為的直観>とは、私のいう<臨床の知>に思いのほか近かったことがわかる。」(P140) と述べている。
- 24 中村雄二郎著、同上書、PP142-172.
- 25 同上書、P162.
- 26 松本直樹著「看護行為と他者認識—西村ユミの研究と西田幾多郎の思索から—」（京都府立医科大学医学部医学科編『Studia Humana et Naturalia』No.46、2012年12月、PP77-106）.
- 27 西村ユミ著（2001）『語りかける身体—看護ケアの現象学—』、ゆるみ出版.
- 28 同上書、P13.

- 
- 29 同上書, P155.
  - 30 同上書, P180.
  - 31 『西田幾多郎全集 第1巻』, P4.
  - 32 同上書, P14.
  - 33 松本直樹著, 上掲論文, PP91-92.
  - 34 『西田幾多郎全集 第1巻』, PP91-92.
  - 35 松本直樹著, 上掲論文, P96.
  - 36 増渕幸男著, 上掲論文, P2
  - 37 同上論文, P13.
  - 38 同上論文, P15. (これは西田の引用文である. 『西田幾多郎全集 第6巻』 P391参照.)
  - 39 同上論文, P15.
  - 40 同上論文, P10.
  - 41 同上論文, P10.
  - 42 ボルノウ著 (1989) 『教育の支えるもの』, 黎明出版, P31. / Bollnow, Die Pädagogische Atmosphäre, Untersuchungen die gefühlsmäßigen zwischenmenschlich-En Voraussetzungen der Erziehung, 3 Aufl. Quelle & Meyer · Heidelberg, S.11.
  - 43 同上書, P31. / Ibid., S.11.
  - 44 同上書, PP48-104参照. / Ibid., S.18-44.
  - 45 同上書, PP106-147参照. / Ibid., S.44-62.
  - 46 同上書, P124. / Ibid., S.51.
  - 47 『林竹二著作集8－運命としての学校』, 筑摩書房, 1983年, P8.
  - 48 同上書, P9.

